

熊本市の済々黌高スーパーグローバルクラスの1年生約40人が17日、水俣市のおれんじ館で、NGOの国際ワークキャンプで水俣市を訪問中の外国人留学生らと水俣病や環境問題について英語での議論に挑んだ。

文部科学省の指定を受けて英語学習を進めている同クラスが、国際発信力向上を目的に初めて企画。同市のNPO法人植物資源の力と、熊本学園大水俣学現地研究センターが協力した。留学生らはドイツなど7カ国の13人で、17〜35歳。

生徒たちは留学生らと8班に分かれて議論し、班ごとに内容を発表。「水俣病を二度と発生させず、差別を生まないため、もっと学ぶ必要がある」「環境問題は国や地域で背景が違う。違いをもっと知るべきだ」などと意見した。

猿渡涼香さん(16)は「英語での議論はとても難しかった。自分の考えをもっと明確にしておく必要があると感じた」と刺激を受けていた。

(隅川俊彦)

済々黌生 留学生と英語で議論 水俣市



外国人留学生らと水俣病や環境問題について英語で議論する済々黌高の生徒たち(奥の2人)

17日、水俣市